

千葉大学ユニバーサルフェスティバル 50 回のあゆみ

見城 悌治

The 50th Universal Festival: Chiba University's Universal Festivals in Retrospection

Teiji KENJO

要旨

千葉大学ユニバーサルフェスティバルは、1995 年に開始された千葉大学の留学生による文化紹介イベントであり、2016 年で 50 回目の実施を見た。そこで、これまでの概要を、41 回から 50 回までを中心に紹介した。さらに、このイベントの特色として、留学生と日本人学生が協働で発表内容を作り上げ、相互理解の場としている事、一般市民の参加も多いため、地域の国際化に貢献している事を挙げた。また、このイベントに関わった日本人学生が、のちに海外留学をするきっかけにもなっている事も明らかにした。

Abstract

Chiba University's Universal Festival is a cultural event organized and performed by international students. This event, which began in 1995, was held for the 50th time in 2016.

This paper presents the outline of the last 10 festivals (from the 41st to the 50th). One of the characteristic features of this festival is its contribution to the internationalization of the local community. Indeed, many of the attendants are local residents who come to seek and experience mutual understanding, exemplified by the student presentations which are the result of collaboration between international students and Japanese students. As I will show, this event often also becomes the impetus for a few Japanese students to later take part in study abroad programs.

はじめに

千葉大学ユニバーサルフェスティバルは、千葉大学に在籍する留学生が日本人学生と協働しながら作り上げる文化紹介イベントである。「千葉大学留学生センター」主催として、1995年6月に始まった本企画は、学内の組織改編にともない、主体が「千葉大学国際教育開発センター」(2004年度～2005年度)、「千葉大学国際教育センター」(2006年度～2015年度)に変わり、2016年度からは、部局としての国際教育センターが廃止され、新たな「国際教育センター」へと転じたものの、2016年12月の実施で50回目を数えるに至った。

このイベントの特色について、筆者が最初にまとめたのは、「千葉大学ユニバーサルフェスティバル 20回のあゆみ」(『千葉大学留学生センター紀要』第8号、2002年3月)⁽¹⁾である。以後、30回を終えた2007年3月には、『千葉大学 Universal Festival 30回記念誌』を単独冊子として作成し⁽²⁾、さらに2011年12月で40回の節目を迎えたのを機に、31回以降を中心に振り返った「千葉大学ユニバーサルフェスティバル 40回のあゆみ」を『国際教育(千葉大学国際教育センター紀要)』第5号(2012年3月)でまとめた⁽³⁾。

本稿は、これら過去の「まとめ」を踏まえつつ、とりわけ41回以降の活動を中心に振り返り、これまでの成果と課題について改めて考えようとするものである。

1 千葉大学ユニバーサルフェスティバルの概要

① 趣旨など

千葉大学ユニバーサルフェスティバルは(以下「UF」と略)、千葉大学留学生センター指導相談部門(当時)が、1995年度から始めた留学生の自国文化紹介企画である。これは、指導相談部門が指導する学生グループ・千葉大学国際学生会(CISG)に所属する学生たち(ほとんどが日本人学生だが、留学生も参加している)が留学生をサポートし、協働作業を重ね、発表のステージを作り上げることに最大の特色がある。その過程において、留学生と日本人学生との交流、また相互理解を促進する成果があるとともに、観覧については学外にも開放しているため、地域における国際理解促進の重要な媒体にもなっている。

第1回から50回までの実施年次、発表国は、以下の通りである。

- 第1回(1995年6月15日) アメリカ
- 第2回(1995年7月13日) フィンランド
- 第3回(1995年10月12日) マレーシア
- 第4回(1995年11月16日) ザイール(現コンゴ)
- 第5回(1995年12月14日) 台湾
- 第6回(1996年1月18日) 中国
- 第7回(1996年5月20日) 韓国

- 第8回（1996年10月24日） ネパール
- 第9回（1996年12月15日） インドネシア
- 第10回（1997年5月28日） オーストラリア
- 第11回（1997年11月27日） パプア・ニューギニア
- 第12回（1997年12月17日） フィリピン
- 第13回（1998年7月9日） ロシア・サハ共和国
- 第14回（1998年10月21日） ベトナム
- 第15回（1999年7月1日） ドイツ
- 第16回（1999年12月2日） バングラデシュ
- 第17回（2000年7月13日）「異文化との出会い～世界を感じて」
イタリア、イスラエル、ブルガリア、ヨルダン、ブラジル、トルコ、中国、アルゼンチン、
フィリピン、ケニア、パプア・ニューギニア、バングラデシュ、タイ、韓国、インドネシ
ア、日本
- 第18回（2000年11月16日） タイ
- 第19回（2001年6月15日） ペルー
- 第20回（2001年12月14日）「世界の響き～ Music Box」 韓国、インドネシア、中国、ロシ
ア・サハ共和国、日本
- 第21回（2002年7月12日） トルコ、中国・ウイグル、アメリカ、ドイツ、インドネシア
- 第22回（2003年1月16日） インドネシア、アメリカ、ベトナム、台湾、ロシア、ハンガリー
- 第23回（2003年7月11日） ミャンマー、モンゴル、ドイツ、ケニア、ブラジル
- 第24回（2004年1月9日） チリ、タイ、インドネシア、オーストラリア、アメリカ
- 第25回（2004年7月9日） ロシア、カンボジア、日本、メキシコ
- 第26回（2004年12月10日） 韓国、ミャンマー
- 第27回（2005年7月1日） 中国
- 第28回（2005年12月16日） オーストリア、アメリカ、ホンジュラス、シリア、ラオス、マ
レーシア、ブラジル
- 第29回（2006年6月21日） キルギス、ベトナム、ロシア、インドネシア
- 第30回（2006年12月7日） ブラジル、コロンビア、モンゴル
- 第31回（2007年6月22日）「アジアの大学生たちとその文化」中国、韓国、タイ、インドネ
シア
- 第32回（2007年12月21日） ガーナ、韓国、ネパール
- 第33回（2008年6月20日） ベトナム、ブルガリア、ハンガリー、カナダ
- 第34回（2008年12月17日） スリランカ、エジプト、オーストラリア、スウェーデン
- 第35回（2009年6月25日） タイ、ドイツ、韓国
- 第36回（2009年12月17日） アメリカ、インドネシア、韓国
- 第37回（2010年6月17日） タイ、ポーランド、ロシア

第38回 (2010年12月16日) ネパール、ベトナム、

【特別企画】韓国の踊り披露、CISG による留学生インタビュー映像

第39回 (2011年6月15日) アメリカ、インドネシア、シリア、中国

第40回 (2011年12月15日) 韓国、ドイツ、ベトナム、

【40回記念企画—世界の音楽】アメリカ、ミャンマー、ブラジル、南アフリカ共和国

第41回 (2012年6月14日) ウガンダ、インドネシア、トルコ、ブラジル

第42回 (2012年12月12日) ミャンマー、キューバ、フィリピン、

【特別企画】ベリーダンス (混成チーム)



第43回 (2013年6月13日) アメリカ、イラン、マレーシア、日本伝統文化紹介

第44回 (2013年12月12日) 中国、ロシア、インド

第45回 (2014年6月5日) フィンランド、ハンガリー、タジキスタン

第46回 (2014年12月10日) インドネシア、ブラジル、ブルガリア、マレーシア、ロシア、オーストラリア、カナダ、グアテマラ、スリランカ、中国、ドイツ、パネルディスカッション (ハンガリー、タジキスタン、インド、韓国、日本)

第47回 (2015年6月11日) ミャンマー、ロシア、コスタリカ、ブルガリア、ベラルーシ、ジンバブエ、オーストラリア、

第48回 (2015年12月9日) インド、タイ、韓国、インドネシア、メキシコ

第49回 (2016年6月9日) 「世界の学校生活」モロッコ、オーストラリア、ロシア、フランス、中国

第50回 (2006年12月6日)

【50回記念特別企画—世界の祭り】ドイツ、カナダ、バングラデシュ、中国、メキシコ

ここに見るように、初年度の 1995 年度には 6 回も実施していたが、翌年から 3 回実施となり、4 年度目にあたる 1998 年度からは年 2 回の実施が定着した。そして、2016 年度において、50 回を迎えたのである。

② 運営形態

第 33 回までの運営形態は、基本的に「主催 千葉大学国際教育センター（留学生センター：2003 年度まで、国際教育開発センター：2005 年度まで）」、「協賛 千葉大学国際学生会（CISG）」、「後援 千葉市、千葉市教育委員会」で行っていた。

一方、第 34 回（2008 年 12 月）からは、「CISG」が実質的な主体であることを示すため、「協賛」から「企画・運営」へと変えた。また、第 35 回（2009 年 6 月）からは、「千葉ユネスコ協会」に「協賛」団体になっていただくようになった。

よって、35 回以降は、「主催 国際教育センター」、「企画・運営 CISG」、「協賛 千葉ユネスコ協会」、「後援 千葉市、千葉市教育委員会」の形式で基本的に実施している。また、第 41 回（2012 年 6 月 14 日）からは、学内の学生支援団体「ノートテイク会」に「協力」という形で、参加してもらっているが、これについては後に詳述する。

③ 製作過程

UF を年に 2 回実施するにあたり、その開催時期は、学生たちの授業進捗（学年暦）の関係から、6 月半ばと 12 月半ばに設定することがほとんどである（2016 年度に行われた学年暦の変更が今後に影響を与える可能性がある点については後述）。そのため、4 月時と 10 月時に CISG が説明会を開き、発表希望者を募集、確定する作業に入る。発表者については、各回の UF が終わった段階で、半年後の「出演」を申し出る学生もいたり、また長期休み中に、日本人学生が働きかける事もあるが、学期が始まった段階で、諸事がスタートするケースがほとんどである。

CISG は UF を実施する体制として、リーダー（サブリーダー）、司会、国別担当、広報、ポスター、パンフレット、装飾、交流会、ユネスコなどの各担当を決め、それぞれ準備を進める。本番と同じ場所（千葉大学けやき会館大ホール）を用いたリハーサルは 3 回行っているが、準備状況によっては、4 回実施することもあった。

発表形式は、パワーポイント（PPT）を基本とし、楽器演奏や舞踏などのパフォーマンスを交えることもある。また、発表のための PPT 作成や読み上げ原稿の日本語チェック（例外的に英語で行う場合もあった）に、CISG は大いに貢献している。さらに、舞踏などのパフォーマンスを CISG が一緒に行うこともあり、その場合は、何度もの練習を重ねた上で、本番に臨むことになる。

発表内容は、発表者の意向を原則的に重んじるが、観客の多数を占める日本人にとってあ

まりにも周知な事などは、CISG が改編を求めることもある。そういう場合、葛藤が生じる事もあるが、その遣り取りを経て、相互理解に至る場合も多い。表に出ることはないが、UF の重要な役割である。ステージ作りの具体的な様子については、末尾にまとめた出演留学生および CISG メンバーの回想を参照されたい。

2 千葉大学ユニバーサルフェスティバル 41 回～50 回の内容紹介

「はじめに」で述べたが、1 回から 40 回までについては、『千葉大学 Universal Festival 30 回記念誌』(2007) および「千葉大学ユニバーサルフェスティバル 40 回のあゆみ」(2012) でまとめているため、ここでは 41 回からの 10 回分の概要を紹介したい。

なお、UF 30 回、40 回をまとめた際と同じく、本稿でも、UF に出演した留学生、サポートした日本人学生から回想・感想を寄稿してもらい、末尾に収録している。以下の叙述において、それらを「史料」として適宜用いる場合がある。その際、「R 1」などと略すが、「R 1」は「留学生感想の 1 番目」であることを示し、「C 1」は「CISG スタッフ感想の 1 番目」を示すものである。

【第 41 回：2012 年 6 月 14 日】

[ウガンダ] ダウダ、[インドネシア] ルクマン、ハキム、マイケルほか、[トルコ] メルヒ、[ブラジル] ジョナタ、リーダー・樹下幸苗。

ウガンダ、インドネシアは、それぞれの社会や文化について PPT で説明した後、ダンスパフォーマンスを行った。ウガンダのダンスは、それぞれの個性を活かしたステップを、インドネシアは練習を十二分に重ねたことが分かる統制のとれた踊りを披露した (R 2)。



この両チームには日本人学生が含まれていたが、一緒にダンスをしたことは「異文化」を体験する得難い機会になった。トルコは、アジアとヨーロッパの架け橋としての役割を論ずるとともに、コーヒー占いのような楽しい文化についての紹介をした。一方、ブラジルは、自然や社会のほか、日系移民の文化について詳しい説明を行った。

【第 42 回：2012 年 12 月 12 日】

[ミャンマー] プー ウェイ、[キューバ] フランシスコ ゴメス、[フィリピン] マリオ リ

コ、[ベリーダンス（混成チーム）]、リーダー・中野有由美

ミャンマーは、4月に行われる「正月」について、伝統行事「水かけ祭り」や食べ物などにより紹介した。キューバは、世界遺産の説明から、市民が愛用しているレトロな乗用車、



さらに情熱的なダンスまでを紹介した。フィリピンは、報告者がかつて作成した「米の大切さ」を描いたショートムービーを上映し、フィリピン人の米に対する特別な感情を観客に印象付けた。

また、ベトナム、タイ、中国の女学生6名は、日ごろ練習を重ねていたベリーダンスを UF のステージで披露した。「自国文化」紹介とは言えないものの、華やかさを観客に伝えきった発表を見ると、こうした形式も良いのでは

ないか、と思わせるところがあった。

【第 43 回：2013 年 6 月 13 日】

[アメリカ] マーティン シュミット、[イラン] アキバリ フーリエ、[マレーシア] アジザン モハマド、ラウ ビク イー他、[日本伝統文化] 居合道研究会、竹葉会、リーダー・田中智之



アメリカは、自国に対するステレオタイプを正すとともに、報告者が生まれ育ったモンタナ州に焦点を当て、自然や歴史・文化について、PPTを用いた説明をした。イランは、正月などの年中行事のほか、雪が降る地方もある事、若者の現代文化など、ふだん知りにくい情報を丁寧に紹介した（R3 参照）。マレーシアは、民族の多様性、地域による文化の相違を説明するため、民族衣裳をまとった学生が続々と登場し、ステージを賑わせた。

一方、この回は、久しぶりに日本文化の紹介があり、伝統的な邦楽演奏と居合の試技が披露された。

【第44回：2013年12月12日】

〔中国〕周玥、李樹傑、〔ロシア〕ベリエヘ アリナ、ロジナ ヤナ、〔インド〕シャルマ・モヒト、リーダー・吉田健太郎



中国は、若者の人生経路や大学生の特色、また地域による文化の相違を紹介するとともに、故郷を愛おしむ歌を熱唱した（R4）。ロシアは、モスクワの有名な建築物や伝統的な食べ物について、説明した後、こちらも民族歌謡を披露した。インドは、広い国土や多様な民族を説明するとともに、インド映画について、踊りを交えた紹介をした（R5）。

【第45回：2014年6月5日】

〔フィンランド〕Markus Valkiala、〔ハンガリー〕Georgios Tsitropoulos、〔タジキスタン〕Mahinoz Usmon、リーダー・吉野汐音

フィンランドは、人気スポーツのアイスホッケーや観光スポットになっている「サンタの町」などを紹介した。ハンガリーは首都ブダペストの風物や、伝統的なハンガリアンダンスについての説明などをした。タジキスタンは、特色ある大自然や人々の営みについて、また市場での駆け引きなど独特な文化について、PPTで紹介した（R6）。



【第46回：2014年12月10日】

【ステージ発表】〔インドネシア〕Robert Dwiputra、Maria Anna Dwi Handayani、Saphira Zahra Amethysta、Sri lestari、Antoni、Arin、Novalia、Vicca Karolinoerita、Meidesta Pitria、Lanassa Lyra。【ポスター発表】〔ブラジル〕Hugo Alexandre Paiva de Assis、〔ブルガリア〕Dimana Danchova ATANASOVA、〔マレーシア〕Yvonne ding jia hui、〔ロシア〕Marzhan Nurgazina、〔オーストラリア〕Matthew Cox、〔カナダ〕Kyle Gough、〔グアテマラ〕Andrée Corado、〔スリランカ〕Oshadha Amarasekara、〔中国〕向沁、鐘莉瑜、郭櫻子、〔ドイツ〕Anna Seitz、【パネルディスカッション】ハンガリー：Georgios Tsitropoulos、タジキスタン：Mahinoz Usmon、韓国：李智賢、日本：宮本眞衣、リーダー・郡川駿佑。



この回は、これまでにない新しい取り組みを行った。まず、オープニングでは、ステージでインドネシアの 10 名チームが、色鮮やかな衣装でダイナミックなサマンドダンスを披露。その後、10 ヶ国の学生がけやき会館の各所にブースを作り、模造紙 2 枚に自国紹介をまとめたポスターを貼り出し、参加者に直接説明する形式を取った。また日本を含む 5 ヶ国の学生が、若者文化などをテーマにしたパネルディスカッションを行い、それぞれの異同を浮き彫りにした。さらに、海外協定校に留学中の CISG メンバーとスカイプを用いた質疑応答ができる部屋を設けるなど、UF の方法について、可能性の広がりを示す回となった。

【第 47 回：2015 年 6 月 11 日】



【ステージ発表】[ミャンマー] Htet Htet Lwin Thein、[ロシア] Mariia Ermilova、[コスタリカ] Karla Marlene Mena Aguilar、[ブルガリア] Marina Slavova、【ポスター発表】[ベラルーシ] Kohan Alexander、[オーストラリア] Matthew Cox、[ジンバブエ] Amos Nyamadzawo、リーダー・近藤理穂、宮本真衣。

テーマを「世界と日本の繋がり」と定めたこの回は、ステージ発表4か国は、10分程度の短時間のなかで、日本との関係性に言及しながら、各国の文化社会を要領よく紹介した。

前回始めたポスター発表も継続し、3ヶ国の学生が、参加者に個別の説明を行った。また、4月に起きたネパール大地震に対し、ネパール学生が義援金募金を呼びかける時間も設けた（この点、後述）。

【第48回：2015年12月9日】

【ステージ発表】[インド] シャルマ モヒト、シッディ ブランダレ [タイ] フィン、フィー、ソムオー、バイテン、タイ、[韓国] キム ソンホ、ジョン ソンファン、ユ・ヒョミン、ソ ビョンフン、パク ウンジョン、カン ソンムウク、ナム テギュ、ジョン・ソジョン、【料理提供】[インドネシア] ディカ ヌルル ヒクマー、ルルク トレスナニンティヤス、[メキシコ] マルチネス ニミ ヒサ マリア、チャコン ファン カルロス、リーダー・川上あゆ美。

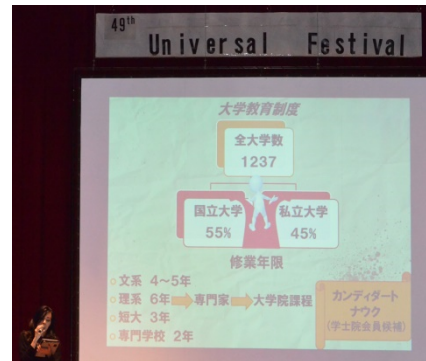
「文化は国境を越える」をテーマにした48回は、「料理のみの提供可」という形も新たに認め、インドネシア、メキシコがその形で参加した。ステージ発表では、インドが独自の文化の紹介のほか、日本人学生を仲間に入れたダンスを披露した。タイも、地域によって踊りに相違がある事を紹介した後、いくつかの踊りについては、実演をした。韓国は、留学生有志が編成している「千打」というサムルノリ・チームが、日ごろの練習成果を大迫力で実演してくれた。



【第49回：2016年6月9日】

テーマ「世界の学校生活」【ステージ発表】[モロッコ] Kamal Mhamdi、[オーストラリア] Ramesh Martyn、[ロシア] Dasha Akuni、Darina Bunkova、Tanya Amirkhanova、【料理提供】[フランス] Vincent Dellac、Tiffany Dion、Clemence Valade、[中国] 張風帆、リーダー・山田里奈、鎌田晃輔

モロッコの報告者は「教員研修留学生」というカテゴリーの現職教員であったため、自分の教え子（高校生）や現地の大学教員のコメントを収録したビデオを流すなどし、モロッコの教育事情について多面的に説明した。また、オーストラリアは、大学生の多様な生活ぶりについて、ユーモアたっぷりの小劇スタイルで紹介し、ロシアも、大学生生活や就職活動の特色を、日本との相違を交えて、分かりやすく説明をした。



【第 50 回：2016 年 12 月 6 日】

テーマ「世界の祭り」【ステージ発表】[ドイツ] Jaqueline Fahlke、[カナダ] Tanner Heaven、[バングラデシュ] Al Mashroor Fatmi、【料理提供】[中国] 陳迪、[メキシコ] Karen Noguez Uribe、リーダー・山中菜々子、河村南帆

50 回の節目を迎えた今回は、「世界の祭り」をテーマとした。ドイツは、クリスマスについて映像を用いながら丁寧な説明を行った。カナダは、自然の壮大さを紹介したほか、アルバータ州のカルガリーで行われる夏祭りを紹介した。バングラデシュは、季節が 6 つあり、冬はかなり寒いという意外な事情を明らかにするとともに、それぞれの季節に応じた祭り、宗教ごとの祭りがあることを説明した。

さらに、「50 回記念企画」として、十数年前および数年前に UF に出演してくれたミャンマー、ネパールの元学生たちと韓国、ロシアの現役院生に、往時を振り返るインタビューをし、それを編集して流した。出演者には、当時 UF に出て感じたことと、現段階でその意味を顧みる内容を語ってくれるよう要請したため、現役の学生たちにも訴えるところが強く、UF 50 回記念に相応しい企画となった。



3 千葉大学ユニバーサルフェスティバルの成果と課題

1) 第 41 回 U F 以降の展開における特記事項

「40 回のあゆみ」(2012)においては、31 回から 40 回までの「特記事項」をまとめてきた。それが 41 回以降、どのように転じたかを改めて検証するとともに、その後の「特記事項」も記録しておきたい。

① 「CISG スタッフの一時的減少」とその後

2007 年春において、上級生に CISG メンバーは残っていたものの、U F などの企画を運営していくに足る下級生の人員が実質的にゼロになる状態が現出した。そこで、第 31 回(2007 年 6 月)の U F は、CISG に委ねることを諦め、教員が主体となり、短期交換留学生に在籍校を紹介してもらう企画を「アジアの大学生たちとその文化」として実施した。たまたま、その回を見学に来ていた日本人学生が、「スタッフになりたい」との意思を示してくれ、辛うじて 32 回に繋がったという過去がある(「40 回のあゆみ」参照)。

しかし、その後は、CISG が主体となった運営が安定的にできる体制に戻ることができた。そののみか、4 月段階では、ここ数年は 50 名余りが加入する盛況ぶりである。ただ、CISG は、定期的活動が、他のサークルと比して少ないためか、辞めて行く学生も多いのだが、U F の運営スタッフが、20 名を下ることはない。

② 「授業科目」としての U F の実施」とその後

2007 年度前期に CISG メンバーが激減し、CISG そのものや U F の存続が危ぶまれる状態になった事は①で触れたとおりである。そのため、2008 年度後期の教養科目中に「国際交流実習」という授業を新たに設け、第 34 回 U F (2008 年 12 月)に関わった学生に単位を与える試みを行った(この詳細な経緯は「40 回のあゆみ」を参照)。

授業時間枠を定時にすることが難しかったため、「集中講義」としたが、トータルの拘束時間が 90 分×15 回を越えた学生も少なくなかったと思われる。また、成績評価についても、迷うところがあり、その後は「授業科目」として開講することはしていない。

なお、2016 年度から、千葉大学は 6 学期制(ターム制)を導入し、原則的に 8 コマで授業が完結する方向にシフトしつつある。この変更によって、「授業」としての U F を行うことは、さらに困難になったと考えている(この点、後述)。

③ 「千葉ユネスコ協会との連動企画」とその後

2009 年 6 月の第 35 回 U F から、千葉ユネスコ協会に「協賛」団体になっていただいている。それをさかのぼる数年前、千葉ユネスコ協会は、国際交流に関係する行事を、千葉大学 けやき会館で独自に実施していた。しかし、「独自企画」として運営実施するのが難しい状況となったため、U F にジョイントできないか、との相談を受け、参加してもらうことになったのがその経緯であった。

具体的には、ステージ発表終了後の交流会における「ユネスコ世界遺産」パネルの展示、

関連DVDの視聴、ユネスコの寺子屋活動等の紹介、また協会の手配で千葉の伝統郷土料理「房総太巻き祭り寿司」の提供もしていただいている。さらには、交流会で、留学生たちが母国の料理を供する場合には、その食材費の負担も引き受けていただいている。

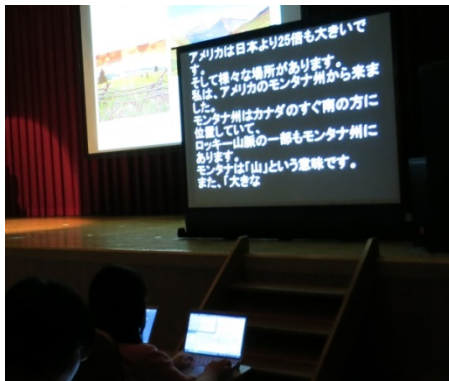
しかし、協会側の人員不足等の理由で、2015 年度をもってパネル展示および寿司の提供は中止となった。しかし、食材費の負担は 2016 年度も継続していただいているため、従前通り「協賛」の形を取っている。

④ 他の学生団体との協力関係構築

41 回以降の「特記事項」も記しておきたい。千葉大学は、「ふれあいの環」と呼ぶ「千葉大学学生総合支援センター」を 2009 年に創設した。そこでの活動の一つとして、学内に存在している「学生による学生支援団体」である①ボランティアコーディネイター、②学生相談ピア・カウンセラー、③career port、④ノートテイク会、それに CISG を加えた 5 団体を会同させ、共同企画も適宜行なうようになった。

しかしながら、「留学生を支援する」学生団体・CISG は、「ふれあいの環」の中間報告書（2011 年 3 月）中で、それ以前からの定期的活動もあるため、「現状では「ふれあいの環」の活動にあまり関与できていない。But 将来的な期待はできる」と、自己総括をするような状態であった⁽⁴⁾。

そうしたなか、2012 年度 CISG 会長であった東朱子氏、副会長の劉孝旻氏などが、ノートテイク会に働きかけ、同年 6 月の 41 回UFから、留学生たちの発表を文字起こしして、スクリーンに写し出すという協業を実現させた（50 回まで継続中）。劉氏（R1）もその回想で若干触れているが、この時の経緯について、東氏によれば、次のようであったという。



「記憶が曖昧な点もあるが、「ふれあいの環」のつながりから、ノートテイク会と提携した事は間違いない。当時、留学生からUFに関して「日本語での発表だけだと、聞き取りが苦手な留学生は内容がわからない」という意見が出されていた事もあり、「発表する留学生の友達を見に来る留学生も楽しめるUFにしよう」という気持ちから、ノートテイク会に依頼して、字幕を

映し出すようになった。ノートテイク会にとっても、聴覚障害者支援の場が少ない時もあったため、本来の趣旨とは異なるものの、活動の機会を創りたいという判断から、協力してくれるようになったと思う」云々⁽⁵⁾。

冷静に考えると、異なる目的を持つノートテイク会に対する依頼としては無理筋であったが、同会に了解してもらったことで、日本語の聞き取りが不十分な留学生の助けになるだけでなく、発音がうまくできない留学生の声を文字化し、聴衆全体の益に供するという二重の効果を得ることができたのである。協力を決断してくれた当時の会員に感謝したい（現在

の会員にとっての（私的な）意義付けについては、末尾資料のN 1を参照のこと）。

このような形で提携ができたことは双方の団体にとって、喜ばしい成果であると言える。

⑤ 近年の発表国・発表者の特徴

1～50回まで発表国であるが、総計で57もの国・地域が出演している。登場回数第1位は、インドネシアの13回、以下、韓国が12回、中国とロシアが10回ずつ、アメリカ9回と続く。7回はタイ、ドイツ、ブラジル、6回は日本、ベトナム、豪州、5回はミャンマー、4回はマレーシア、ハンガリー、ブルガリア、3回はフィリピン、ネパール、インド、バングラデシュ、トルコ、カナダ、メキシコ、2回は台湾、スリランカ、モンゴル、タジキスタン、フィンランド、ケニア、パプアニューギニア、ケニア、ホンジュラスである。1回だけは、ラオス、カンボジア、キルギス、イラン、ヨルダン、シリア、イスラエル、ベラルーシ、スウェーデン、イタリア、オーストリア、フランス、ポーランド、エジプト、モロッコ、南アフリカ共和国、ウガンダ、ジンバブエ、ザイール（現コンゴ）、ガーナ、キューバ、グアテマラ、コロンビア、ペルー、アルゼンチン、チリであった。

30回までの発表が39の国・地域であったので、後半の10年（20回分）で、18ヶ国増えたことになる。少し微細に見ると、31～40回での新規登場は7ヶ国、41～50回は、11ヶ国となっていて、千葉大学が多彩な国から留学生を受け入れている現実を反映していると言える。また、全体を見渡すと、留学生の9割を占めるアジア地域が主流を占めていることは間違いないが、欧米、アフリカ、中南米の学生もバランスよく登場している点に特色を見ることができるだろう。

なお、「40回のあゆみ」で既に記したが、第一位がインドネシア、第二位が韓国である理由について、再説しておきたい。すなわち、それぞれは留学生会等のネットワークがしっかりしていること、またインドネシアはダンスや音楽などで仲間が集まることが多く（R 2、R 7）、さらに韓国は「千打（チダ）」というサムルノリ・チームを留学生有志が結成している事が大きいと考える（R 1）。

2) 成果

2007年3月にまとめた『千葉大学 Universal Festival 30回記念誌』に中で、筆者はUFの成果について、a) 留学生と日本人学生の協働作業、b) 留学生の生の声を伝える「場」の提供、c) 地域社会の国際理解への貢献の3つを挙げた。31回以降の10年間を総括した「40回のあゆみ」では、それに、d) 派遣留学への動機づけとしての役割、e) 映像を用いた新しい発表形式の2点を追加している。

41～50回においても、これら5項目は引き続き、重要な成果として生きていると考えているので、それを若干説明しておきたい。

「a) 学生と日本人学生の協働作業」については、これまでの筆者の旧稿でも、また1章でも触れた本企画の最大の目的であり、また成果点である。日本人学生にサポートされて、

ステージ発表が完成できた喜びについては、R 4、R 5 などが謝意と併せ、語っている。また、長いUFの歴史の中で、唯一実現したパネルディスカッション（46回：2014年）では、下準備としての議論を行った際、意見対立が生じたものの、最終的には理解し合えたことを、R 8、C 4、C 6 等が率直に記している。

さて、現在はインターネットの普及により、かつてないほど情報を入手しやすい、あるいは情報が氾濫する時代になってきたが、一方で、外国（人）に対するステレオタイプの思い込みは強固に残り続けている。そうしたなか、「b）留学生の生の声を伝える「場」としてのUFは大きな意味がある。とりわけ、ステージ発表終了後の「交流会」で、発表した学生に直接話しかけ、自らの認識を修正することは、一般参加者にとって、きわめて有益である。あるいは、留学生側から言えば、それを果たすために、発表を希望した側面もある事が、R 3やR 9の証言から確認できる。

「c）地域社会の国際理解への貢献」についても、「40 回のあゆみ」の総括と同様に高い評価ができる。日本人学生の参加比率は上がりつつあるが、それでも会場の3割ほどは学外



の方々によって占められている。また、近隣の高等学校生もしばしば参加しており、「地域における気軽な国際理解・交流の場」になっていることは間違いない。

なお、「40 回のあゆみ」には、地域ボランティア、自治体の交流協会会員、高校教員などからの感想も収めている。「地域にとっての意味」はそちらを参考されたい。

「d）派遣留学への動機づけとしての役割」については、40 回段階よりも、さらに重みが増してきたと考えられる。そもそも留学生の発表者は、千葉大学が交流協定を結んでいる大学からやってきた交換留学生であることが多い（たとえば、R 5は中国の協定校から短期留学をした時に発表者となった）。

一方、日本人学生も、UFスタッフとして関わった後、協定校を含む海外の大学に長期、短期の留学する例が増えている。C 3、C 5 がそれにあたるが、特に、C 3は、現在留学している自らが置かれた現状を相対化する中で、UFの意義付けを改めて行っている。

なお、第46回（2014年）では、交流会の時間帯に、スカイプを用い、フィンランド、アメリカ、タイに交換留学しているC I S Gの日本人学生と直接対話ができるブースも設けた。留学先の状況について、顔見知りの先輩また同級生に、リアルタイムでの質問ができるこの企画は斬新であった。

「e）映像を用いた新しい発表形式」については、「40 回のあゆみ」以降も引き続き、進化し、また効果的に使われている。たとえば、UF開会の冒頭に、（多少の）メッセージ性を込めたショートムービーを作成し、上映したことも一再ならずあった。

50 回（2016 年）では、10 年ほど前に U F 出演し、現在社会人として活躍している O B たちに往時の思い出や現在について語ってもらい、それを編集し、流す試みを行った。これは、b でまとめた「留学生の生の声を伝える」という理念からは少々外れ、双方向性を欠く形式ではあるが、自ら 10 年前の体験を総括し、後輩にその意義を伝える、という点に格別の役割があったと考えている。このような方法はもっと模索されて良いだろう。

なお、「発表形式」ではないものの、ノートテイク会の協力による「字幕」の投影は、日本語力が十分でない留学生に対する助けとなっている事を、繰り返しではあるが、付言しておきたい。

また、6 番目の「成果」（f）と位置付けるほどではなく、ある意味で当然の結果ではあるが、R 3 や R 7 の感想に見えるように、U F への出演が「同国人」同士の結束や友情を育む場になっているという点も付け加えておきたい。もちろん、日本人学生と一緒にパフォーマンスなどの準備を重ねる中でも、同様な効用が生まれている事は言うまでもない（R 2、R 6 を参照）。

さらに、就職が決まっている 4 年生（C 4）からは「この経験を仕事に役立てたい」、また卒業した O B / O G からは、「経験を活かしている」という感想が提出されている（C 1、C 3）。これらも、U F がもたらした 7 番目の「成果」と言えるかもしれない。

3) 今後の課題

『30 回記念誌』で挙げた U F の「今後の課題」は、a) 入念な準備作業の必要性、b) 学生の負担の軽減・分散化、c) 地域ボランティアとの連携の模索、の 3 点であった。また、「40 回のあゆみ」では、それに、d) 新しい発表形式の模索、e) 千葉大生の参加増加、f) 国際的人道支援等との連携、を加えていた。

その後の 5 年で、それらの課題は解決したのだろうか。簡単にコメントしておきたい。

a)、b) について、「40 回のあゆみ」では、「メンバーが 50 名前後になったので、やり方に留意さえすれば、ある程度解決がつくだろうが、永遠の課題でもある」と書いたが、現状での認識はこの時と変わらない。ここ数年の SNS の発展、とりわけ学生たちが「LINE」を主たる連絡ツールとしたことで、情報交換が格段に簡便になったことは大変化である。しかしながら、それによって、極端に良い方向へ、あるいは悪い方向へ傾く様子は特に見られないようだ。

c) の「地域ボランティアとの連携の模索」については、千葉ユネスコ協会が 2016 年度から、パネル展示等を辞めたため、「ユネスコ担当」のスタッフが要らなくなった。その意味では、後退と言える。教員側としては、学生のネットワークを広げ、経験値を高める意味で、こうした方面との連携を考えたい気持ちはあるが、現実的には難しい側面がある。

d) 「新しい発表形式の模索」についてであるが、第 46 回（2014 年）は、全く新しい試みを行った画期的な回となった。すなわち、ステージ発表でのダンスパフォーマンス披露の後、10 ヶ国学生によるポスター発表、5 ヶ国学生によるパネルディスカッション、スカイ

プを用いた海外との対話、の新企画を一举に3つも展開し、成功に導いたことである（C5を参照）。



パネルについては、これまで一度も実現し得なかった企画であったが、日常的に交流のある顔見知りの学生同士をパネラーにした事で、準備過程も含め、うまく行ったと言える。学会のシンポジウムとは異なり、ある程度の「落としどころ」を想定しないと、企画としては難が生じてしまう恐れはあるが、再度の企画

を望みたいところである。

ポスター発表は、ステージに比し、簡便に準備でき、また聴衆に対面で説明する形をとることから、派手さはないものの、適宜実施していったほしい企画である。

スカイプを用いた対話は、留学に興味ある学生が気軽に質疑を交わせる空間を用意したという点で画期的と言え、今後、様々な可能性を感じさせる企画であった。50回で、OBへのインタビューをビデオ上映した事には触れたが、それらを含め、「新しい発表形式」は、まだまだありそうである。

e)「千葉大生の参加増加」は過去に比せば、漸次の増加は認められる。これは、千葉大学が「スーパーグローバル大学」に指定されるなど、「国際化」への環境づくりがされている事とも関連していると考えられる。しかし、320席もある大ホールが、学生たちによって埋め尽くされる状況には至っていない。学生を惹きつけるに足る内容の精査や宣伝活動の工夫などがさらに必要となるだろう。

f)「国際的人道支援等との連携」

2015年4月におこったネパール大地震に際し、CISGメンバーはネパールの留学生と協



力し、募金活動を展開し、第47回UF（15年6月11日実施）でも広く参加者に義援金カンパを呼びかけた。この時は、学内での募金活動だけでなく、大学周辺の飲食店に募金箱を置かせてもらったり、また千葉駅周辺での街頭募金も行い（学部や地域ボランティア団体からの募金も最終的に一つに取り纏めた結果）、総額 491,775 円を集めた。

このすべては、ネパール大使館の口座に振り込み、また大使館に赴き、全権大使に目録を直接手渡すことができた。

ここ5年間の人道支援活動は、ネパール地震だけであったが、さかのぼれば、インドネシア地震、中国・四川省地震、ミャンマーのサイクロン被害などに対する募金活動を CISG は

行っている。UF という場に限られる事ではないが、こうした活動にすぐに動き出せるような態勢をメンバーが持ち続ける事は大切であろう。

g) 大学の改組とUFの行方

「はじめに」に記したが、UFは、1995年に「留学生センター主催」として始まり、その後、「国際教育開発センター」、「国際教育センター」と形が変わっても、核となる教員に変動がなかったため、22年間継続してきた。

しかるに、2016年度、千葉大学が「国際教養学部」という新学部を創設した際、国際教育センター所属の専任教員は、すべて「国際教養学部」に配置替えとなった。専任教員が一人もいなくなった国際教育センターであるが、留学生教育等に関わる教員はやはり必要なため、2016年度に新設された「千葉大学国際未来教育基幹キャビネット」の中の一センター「国際教育センター」に転じ、旧国際教育センター教員などがその「兼務教員」に就き、それまでやってきた業務を継続していくこととなっている。

その移行転換期と言える2016年度において、UFは、新「国際教育センター主催」の名の下で、従来と変わらない年2回の開催を完了した。しかし、担当教員の将来的な業務分担などが未確定な点があり、従前通りの運営が継続できるかは不透明なところがある。

さらに、UFの実施時期であるが、これまでは、大学が15週の授業をおこなう「 Semester制」を取っていたため、その折り返しにあたる6月上旬、12月上旬にそれぞれ開催し、学生たちの繁忙期と重ならないような配慮をしてきた。しかし、2016年度から、千葉大学は8週の授業を6つの学期に分けて行う「ターム制」への移行を開始した。その結果、これまでと同じ時期に設定すると、試験期間とUFの準備が（多少はズレるとしても、基本的には）重なることが避けられない状況にある。こちらについても、どのように対応していくのかが、大きな問題になっていくことが予想される場所である。

おわりに

筆者は「40回のあゆみ」の末尾で、これまで、「UFを継続実施してこられたのは、発表を快諾してくれた留学生たち、またそれをサポートし協働してステージを創り上げたCISGメンバーたち、留学生課のスタッフ、さらには陰に日向に支えてくれた地域ボランティアの方々のお陰である。改めて感謝を申し上げたい」と書いた。50回を終えた現在も、その気持ちは全く変わることがない。しかしながら、大学の組織替えなどによって、UFのあり方が変容していく可能性は否定できない。UFの意義や成果については、論じてきたとおりであり、それらは何らかの形で活かしていきたいと考えるが、本稿はここで擱筆せざるを得ない。

本稿は、「千葉大学ユニバーサルフェスティバル40回のあゆみ」（前掲）での記述と重なる部分がある。一方、そちらでは触れながら、本稿では記述を割愛した40回（2011年度）までの論点も少なくない。そのため、「UF50回のあゆみ」全体を見渡すためには、「40回のあゆみ」も併せて参照いただければ、幸いである。

【謝辞】

1995 年度に、CISG を創設し、ユニバーサルフェスティバルを開始したのは、新倉涼子先生であった。その先生が、2017 年 3 月末をもって、千葉大学を定年退職されることになる。今回、UF の感想を寄せてくれた人々は、UF への高評、また参加できた事への喜びを重ね綴っているが、担当教員に就いた私にとっても、UF は、留学生、日本人学生、教職員、地域の人々を知り、それらとの結びつきを深めるための他に代え難い貴重な場であった。UF を創始されたことを含め、新倉先生による長年にわたるご教示に対し、厚くお礼を申し上げたい。

《巻末史料 UF に関わった人たちの感想、意見、提言》

第 41 回から 50 回までの UF で発表した留学生（元・現）（10 名）、スタッフとして関わった CISG（元・現）メンバー（10 名）、協力団体である「ノートテイク会」メンバー（1 名）に対し、UF をめぐる感想・提言の寄稿を依頼したところ、21 名から文章が寄せられたので、以下に収録、紹介する。

なお、以下の各文章中で、各執筆者が原稿で用いた「千葉大学ユニバーサルフェスティバル」を意味する語については、すべて「UF」の略称で統一した。

【留学生（元・現）たち】

[R 1 劉孝旻：ユ ヒョミン（韓国：40・48 回発表 / CISG スタッフ：41・42 回）]

私は、2012 年度の CISG 副会長だったため、同年の 41、42 回 UF で裏方の仕事をやりました。またその一方、40、48 回の UF では、留学生として参加、発表しました。

まず UF を企画運営する CISG のメンバーとして、私が考えたのは、できるだけ多くの日本人に参加してほしい、という事でした。そのために、UF が単なる学生の発表と思われず、専門的な発表の場である、というイメージを与えるため、工学部デザイン専攻であった私は、ポスターの制作に力を入れました。ポスターそのものは、発表内容にあまり関係がないと言えますが、ポスターがよくできていれば、UF を見に来てくれた人たちが、より良い気持ちで発表を見ることができるはずだと信じて、作成したのです。

また、その他には、聴覚障害者をサポートする学生団体である「ノートテイクの会」の人たちの協力を得て、字幕スクリーンを 41 回から設置する事にしました。それによって、聴覚障害を持つ人だけでなく、発表者の言葉が聞き取りにくい人々や留学生たちの助けになったと思います。特に、42 回 UF は新聞にも記事が出たので、かなり成功だったと思います。



その後、私は兵役のため、韓国に戻り、2年間休学をしました。そして、それが終わった2015年、ふたたび留学生として48回のUFで2回目の発表することになりました。前回(40回)は韓国の文化をできるだけ多く伝えることに重点を置きましたが、今回は韓国の伝統音楽であるサムルノリ、それだけをより強く伝えることと、それによってUFの雰囲気を盛り上げることを目標にしました。その結果、演奏が無事に終わった時にもらった大きな拍手は、今でも忘れられないです。こんなに多くの人々が来てくれて、また喜んでくれて、とてもすばらしいと思いました。

韓国にいる時の自分の経験では、留学生の発表にこんなに多くの人々が集まったことを見たことがなかったので、このような発表をする機会があることも、その発表を毎年見に来る人たちがいることも、すごいと思います。UFは凄くいい趣旨のイベントだと思っているので、50回だけではなく100回もそれ以上も続くことを願っています。

(2017年3月現在〔以下、すべて「現在」と表記〕 千葉大学工学部3年生)

[R2 スラメット マイケル スサント (インドネシア :

41回発表 / CISG スタッフ: 41・42・43・46回)]

まず最初に、UFが50回目を迎えたことを、発表者とスタッフとして関わった者として、大変嬉しく思っております。おめでとうございます。

私は、千葉大学に入学した後、留学生という自分のステータスと日本語能力を役立たせ、また、いろんな人と絆を結びたいと思い、CISGに入りました。そこで、留学生の支援をしながら、たくさんの友達を作り、様々な形で交流しました。私にとって、UFは其中でもとても大切な交流の場であったと思っています。

最初にUFに携わったのは、第41回(2012年6月)で、インドネシア留学生としてダンスを披露しました。その時は、日本人学生と毎週練習して、練習の後是一緒にご飯を食べたり、話したりするなど、とても楽しかったです。さらに、UFでダンスを披露した後の交流会の場で、UFスタッフや他の発表者を含めた多くの人と交流できました。

このUFへの参加をきっかけに、私はUFの存在意義が非常に大切だと思うようになりました。また、スタッフの話を聞き、留学生がUFで発表することを不安に思っていることも知りました。とても良い交流の場なのに、そうした状況を残念に思い、自分がなんとかそれを支援できればと、今度はUFのスタッフとして関わるようになりました。特にUFは公式の場で行うイベントのために、私はプレゼンテーションの精査に努めました。また、それ以外にも、舞台監督として、ステージで行われるイベントのチェックを担当し、ステージ発表の準備から、他のスタッフや留学生への指示出し、さらに片付けまでを行いました。

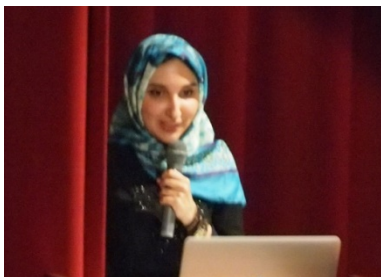
この時の経験から思ったのは、UFはもっとたくさんの形を持って、開催されれば良いという事でした。幸いにも、私が関わった第43回(13年6月)のUFでは、特別発表として、日本の伝統文化の紹介を行ない、日本人のみならず、発表者以外の留学生の興味を引くことができました。また、第46回(14年12月)のUFでは、さらに形を変え、よりフェ

スティバルっぽく、ステージでのプレゼンテーション発表に限らず、たくさんの国の留学生に、ポスター発表や、海外留学中の千葉大生とのスカイプ対話、そして留学生によるパネルディスカッション（トークショーのようなイベント）をも盛り込んだUFを開催することができました。

さらに、同期生が CISG のミーティングに顔を出さなくなるようになった段階においても、私は、留学生で、しかも同期より少し上の年齢でありながら、ミーティングに出席し、後輩にできるだけの助言をしました。その場では、CISG、そしてUFスタッフの大きな課題として、やはり引き継ぎがまだできていない部分があると感じたため、時折、後輩たちに厳しく指摘することもありました。いま思えば、後輩たちには少し申し訳なかったところもありますが、これもUFという大きなイベントのために、そして、日本人と留学生の更なる深い交流のためだと思っています。

私は 2012 年 4 月に千葉大学工学部の 3 年生に編入し、2016 年 3 月に千葉大学大学院修士課程を卒業しました。現在は、日系の IT 企業に勤めています。千葉大学を訪れる機会は中々ありませんが、今後も陰ながら、UF および CISG を応援していきます。次のUFも期待し、また楽しみにしています。

[R 3 アキバリ・フーリエ（イラン） 第 43 回発表]



2013 年、千葉大学に入学して間もない時に、CISG の学生から「日本人の前でちょっとイランを紹介してくれる？」と誘われ、気楽に引き受けた事は、今でもよく覚えています。しかし、けやき会館の大ホールで、大勢を前にして発表することを知った時に、自分が本当にイラン代表で大丈夫なのか、とても心配になりました。

UF でイランが紹介されるのは、その時が初めてでした。このようなチャンスを頂いた私は、あまりテレビや報道で取り上げられていないイランを皆さんに紹介できればと考えました。イランの 2500 年前の古代の歴史紹介から、イランの新年（3 月 21 日）での行事、現在の若者の流行や服装まで、幅広く紹介しました。また、イランは砂漠ばかりで暑い国であるという印象を持っていた日本人の方は、特に多いようです。そのため、パワーポイントでは、カラフルなイランの景色をお見せし、イランには四季があることを強調しました。発表後に日本人から頂いたコメントでは、「イランには、スキー場があるんですね～」などと、雪が降ることに驚きを見せていた方が多くいました。

ステージ発表が終わった後の交流会では、イランの民族衣装を着た日本人学生と、千葉大学在学中のイラン人留学生の仲間が、イランのお茶と有名なお菓子を提供してくれました。普段は、あまり日本人と交流する機会がないイラン人留学生や彼らの家族もUFに参加したことで、貴重な経験ができたと話していました。

UFへの参加を通じ、自分の国でごく当たり前であること（習慣・文化・歴史）が、異文化の社会では、驚かれたり、新鮮に感じとられたりすることを、とても興味深く感じました。なおかつ、まだお互いの文化で知らないところが沢山あることにも、気づかされました。

UFでイランチームをサポートしてくれた、何名かの日本人学生とは、未だに連絡をとっています。その中の2人が、遠いイランに観光へ来てくれた時には、本当に嬉しかったです。そして、また彼／彼女らが自分の目でみたイランを日本人の方々に紹介してくだされば、これ以上嬉しいことはありません。UFがこのような交流の機会を私たちに与えてくれたことに、心から感謝を申し上げたいです。

（現 千葉大学大学院 人文社会科学研究科博士後期課程在籍）

〔R 4 周玥・李樹傑（中国） 44回発表〕

2013年の44回UFでは、私（周）が一年間、千葉大学に交換留学をしていたため、参加させていただきました。日本語はまだ流暢ではありませんでしたが、日本人の方々に中国を紹介する良い機会だと思い、勇気を出して引き受けました。

準備の期間は CISC スタッフの助けをいただき、発表文章の文法的な間違いや言葉の誤用などを何度も直してくださいました。何を発表しようかと戸惑った時も、どんな内容なら日本人の興味を引き出せるか迷った時も、日本人学生が、いつも面白い発想を出してくれた事に感謝を申し上げたいと思います。



この時のUFでは、ロシア留学生はロシアの民謡を披露し、またインド留学生はボリウwoodsのダンスをしましたが、私は、工学部の正規学生だった李さんと一緒に中国のことを紹介しました。中国の東北出身の李くんは、東北の代表的な料理や民俗を語り、南出身の私は湖南省の臭豆腐と花火を紹介しました。また、中国の人気歌手について話した時、留学生としての自分の故郷や親への恋しさを込めて、愛し合う人々がいつでも団欒できる内容を持つ中国語の歌『水調歌頭』を歌いました。一方、李くんは、主にプレゼンの“ボケ”役をやってくれ、中国を代表する動物・パンダのマスクを被って、みなに印象を残しました。発表中にパソコンのトラブルがあった時も、日本で有名な一発ギャグをやって、笑いを取り、その場の空気を盛り上げてくれました。

このように、UFの場を借りて、中国の様々な文化を日本人に伝えることができた事は、本当に良かったです。私は、自分と日本との縁を確信したため、交換留学終了後、ふたたび千葉大学の修士に進学する事にしました。そして、これからも、両国の間の架け橋になるため、頑張っていきたいと思います。

（現 周：人文社会科学研究科修士課程1年／李：工学研究科修士課程1年）

[R 5 シャルマ・モヒト (インド) 44・46・48 回発表]

私は 44 回UFで、UF 史上初めてインドについての発表をさせてもらった。そこでは、インドの文化と映画産業について話し、またデザート料理とチャイを提供することができた。インド人の私は、発表に大きなプレッシャーを感じたが、周りの助けを得ながら、前向きに挑戦した。



そして、46 回では、パネルディスカッションのメンバーとなり、インドの若者や大学生活、祭りなどについて討議した。48 回で、また自国について話す機会を再度いただき、インド独特なボリウッドダンスを踊った。このダンスは CISG のメンバーと一緒に、約 1 ヶ月間練習し、本番の時は 10 人で公演した。一緒に踊ってくれたメンバーは言葉の理解が難しい中、よく頑張ってくれたこともあり、尊敬している。これこそが、まさしく国際的な祭り＝「UF」だと感じた。また、それぞれのステージ発表後、一般参加者と気軽に意見交換をしたり、感想を聞いた事により、少しでも国際理解を深められたのではないかと考えている。

このような国境を越え、相互の文化を理解する機会を設けたことで、学生たちが世界を理解する機会を得られ、とても良かったと思う。私が行った 2 回の発表では、自国のインドの異なる面を紹介でき、参加者から温かい言葉を頂いたことは、忘れられない経験となり、今でも誇りに思っている。

当然の事だが、私が一人で規模が大きなUFで発表できたのは、CISG のスタッフ達、先生達のお陰だと思っている。資料作成や発表練習やダンスの際も、力を貸してくれたので、毎回UFで成功を収めることができた。これからもUFが永遠に継続し、そのために何か力になれることがあったら関わりたいと思っている。今後のUFが、どのようになって行くのかをとても楽しみにしている。

(現 工学部 4 年生)

[R 6 ウスモン マヒノーズ (タジキスタン) 45 回・46 回発表]

UF の留学生発表者として「UF 50 回のあゆみ」に書かせていただくことを光栄に思います。私は 45 回UFでプレゼンテーション発表し、46 回ではパネルディスカッションに参加させていただきました。45 回の発表では、私の母国タジキスタンを紹介しました。その時、私は学部 1 年生だったため、発表できる自信はありませんでしたが、CISG のタジキスタン担当者から、いろいろ学ぶことができました。その時のメンバーが発表の準備を手伝ってくれ、また異文化交流ができたため、私は日本人ともっと仲良くしたいと思いました。そして、私の発表は CISG の助力のおかげでうまく進みました。日本ではあまり知られてい

ない母国タジキスタンの文化や習慣について、千葉大学で紹介でき、本当によかったと思います。

46回のUFでは、パネルディスカッションのメンバーとして参加しました。この時の発表は45回と大きく異なり、一人で発表するのではなくて、5ヶ国（インド・韓国・タジキスタン・日本・ハンガリー）の学生が、それぞれの文化を比較し紹介することを目的にしました。そのため、どの国の人生でも、一般に見かけるテーマを選び、討論することになったのですが、準備過程で、5ヶ国の共通点と相違点について、たくさん話したため、みな互いの国について詳しくなりました。それを舞台で紹介するとき、パネルディスカッションは発表時よりも、各国の人が一人ずつそれぞれの経験のことを、みんなの前でディスカッションしたという気持ちが強かったのです。



世界がどんなに広くても、国・習慣・文化・習慣・宗教などがどんなに違っていても、我々は互いの助け合いを必要とします。それぞれの国境を越えた人との出会いで、社会に関しての考えを変え、異文化で人間関係を大事にすることが重要だと思います。

（現 文学部日本文化学科 3年生）

〔R7 ロバーツ ドゥウィプトゥラ（インドネシア） 46回発表〕

私は、2014年12月に開かれた第46回UFに参加させていただきました。UFを運営するCISGメンバーから、「インドネシアから何かを発表してくれないか」と最初言われたときに、何ができるのだろうかと考え始めました。当時は、千葉大学に来たばかりのインドネシア留学生在が私を含め大勢いましたが、それぞれがこういった趣味や興味を持っているかは把握していませんでした。

最初は、インドネシアの音楽をやりようかと思いましたが、冬休みでほとんどのインドネシア留学生在が帰国するため、人数が揃いませんでした。そこで、自分が4年前から独学していたインドネシアの伝統的なダンスの一つサマンダンスを思い出しました。



これは、スマトラ島で生まれたダンスで、大人数でやる場合が多く、踊りの順番や伝えたい意味を自分でアレンジできるかなり幅広いダンスです。これなら、皆と一緒にアレンジできるし、またもう一回ゼロから楽しく練習できるのではないかなと思ったのです。

しかし、現実はそんなに甘くありませんでした。サマンダンスは基本的に男女が一緒に踊り、男性からは強さ、女性からは優しさが感じられるダンスなのですが、友達の中からパーフォーマーを探すときに、断った人が多かったのです。特に男性が……。しかし、参加したいという友達と、いろいろな方法で他の留学生を説得し、何とか10人ほどのチームが決

まりました。

実際にダンスの練習を始めようとした時、メンバーの専門や課程が異なるため、練習時間を合わせる事が最大の問題になりました。お互いにビデオを送り、個人練習をするなど、様々な方法を使って、何とかダンスの形が決まり、一人一人のスキルが徐々に上がってきました。本番まで2週間ぐらいになり、特別練習を行い、皆のリズムを合わせました。練習は辛かったですが、その中に、楽しさも感じました。たとえば、参加をいったん断った友達が続々に練習に顔を出して、差し入れ等を持ってきてくれた事です。彼らの応援は、私たちチームにとって、非常に力になったものでした。

そして、何とか無事に本番に迎えることができ、体と心の準備もチームとして完成した気がします。ずっとリーダーとしての責任を感じていた私が、いつの間にかその責任感をチームの皆に分け与え、皆と一緒に背負うことになりました。チームとして準備に入り、チームとして舞台上がり、チームとして最高のパフォーマンスができました。終了後、盛大な拍手を浴びて、数か月の疲れや苦労が取り返された気分でした。

UFのおかげで、サマダンに参加したメンバーが、一つのチームとして成立しただけではなく、仲間同士も、より人間として仲良くできた気がします。

(現 千葉大学大学院 工学研究科 建築・都市科学専攻 修士2年)

[R 8 李 智賢 (イ ジヒョン) 韓国 46 回]

私が参加した第 46 回のUFでは、それまでのUFとは一味異なった形式であるパネルディスカッションをプログラムの一つに導入しました。日本、韓国、タジキスタン、インド、ハンガリーの5ヶ国の同世代の学生が、同じステージの上で、お互いの国の文化を紹介し、その相違への疑問に対して、素直にその場で聞いて答えるという形式は、私にとってとても良い刺激を受けた時間でした。



最初、「パネルディスカッションをしてくれないか」との話を受けた時は、これだけ多様な国の人たちが同じステージで話をまとめていくことが果たして可能なのだろうか、と疑問に思っていました。しかし、本番に向けての準備過程で、一緒に関わってくれた学生たちと、自国のことを含め、一人ひとりの考え方を複数のテーマで話し合いながら、新しい文化を知る楽しさ、多様な価値観とぶつけ合うことからの喜びを実感しました。もちろん、国籍も、性別も、性格も異なる人たちが集まって、話し合うことは、最初かなり大変で、「私はその文化は良くないと思う」とか、「それは間違っている」と言う展開になることも多々ありました。しかし、みんなが積極的に声を出し合いながら、色んな意見を接するようになり、後には、私を含め、学生メンバーみんなが

「それ面白いね!」「違う国のことも聞いてみたい」と、討論を楽しめるようになった覚えがあります。そういう環境が可能になった理由として、私は、その時のUFに関わった日本学生が皆、海外に対してオープン・マインドで、外国人留学生たちの話を偏見なく受け入れてくれたのと、留学生側も、日本の文化でおかしいと思っているところがあっても、そうした気持ちの中には、日本で出会った人々への感謝と、日本という国への愛情があったからこそ、お互いの文化が理解できるようになり、素晴らしい成果を得ることができたのだと思います。

そして、本番でも、留学生が一方的に発信する形での発表ではなく、客席とステージの上から出てきた質問や反応によって、その都度、楽しく話すことができ、勇気を出して参加して本当に良かったと今でも思える貴重な経験でした。

最後に、CISGのメンバーへ感謝の気持ちを伝えたいと思います。私に参加の提案をしてくれて、また毎年頑張ってUFを準備してくれて、本当にありがとうございます。これからも応援し続けます。

(現 法経学部4年)

[R9 オーシャダ アマラセーカラ (スリランカ: 46回)]

私は千葉大学在学中、サークル活動などをやっていたので、日本人の友達が沢山いました。友達と話し始めた時、名前の次に聞かれるのは、「オーシャダって、何人ですか?」という質問です。「スリランカ人だよ」って答えたら、「スリランカって、紅茶で有名なあの国でしょうね?!」とほとんどの日本人が返します。

しかし私にとって、日本人がスリランカについて知っておくべきことは、紅茶の話ではありません。スリランカと日本の友情関係の始まる点となった1951年のサンフランシスコ講和会議の話(見城註一この会議に出席したセイロン(当時)代表のJ・R・ジャヤワルダナ氏が対日賠償請求権の放棄、および日本の国際社会復帰を訴えた事)を、なぜ日本人の若者は知らない



のだろうか、いつも思っていました。スリランカの中学校の教科書にも載っているこの話を、日本の学校でなぜ教えないかはわかりません。ある意味で片思いとなっているこの話を、千葉大学の若者に教えたくて、私はUFに参加したのです。それ以外に、スリランカの一般情報や日本では実施していない無償教育制度の話もしました。

UFで話そうとした目的はそれでしたが、イベントが終わり、振り返ってみると発表してよかったことがいくつかあります。一つは新しい知り合いができたことです。千葉大生以外にもユネスコの人や他の外部の方も沢山発表を見に来ていましたので、いろいろな人と話しすることが出来ました。個人的に話をした方も何人かいて、話の最後に「スリランカに

行ってみたいな」と言われた方もいます。スリランカについて、紅茶の知識しかなかった方、スリランカがどこにあるかも知らなかった方、そういう様々な知識レベルを持った方々が、私の発表を聞いて、なにかしら新しい知識を得られたのではないかと思います。UFは、周りの方々にあまり知られていなかったスリランカについて、私がアピールできる大きな機会になったのです。

(2016 年度千葉大学工学部卒。現 筑波大学大学院 システム情報工学研究科 (構造エネルギー工学専攻) 博士前期課程 1 年)

[R10 カマル モマメド (モロッコ : 49 回発表)]

My participation in 49th Universal Festival was an amazing experience and a precious opportunity for me to share with Japanese as well as international students about my



country. As everyone knows, not many Moroccans live or even have the chance to visit Japan, and in Chiba University I was the only Moroccan student, so it was both a privilege and a responsibility to present about my country. The UF's theme 'Schools around the World' was the best coincidence I could wish for as I am in Chiba University as a Monbukagakosho teacher-training student. In addition to the presentation and the two short video clips that one of my students (Zakaria Chih) and I specially made for the U F event, my wife and I were really glad to prepare some Moroccan food and share with the attendees. Hearing the positive feedback from our friends and colleagues who attended the event brought a lot of joy to my whole family, even back in Morocco as we were sharing with them all the cherished moments.

If you ask my opinion of the Universal Festival I would simply say that it was one of the most important cultural events I attended in Japan as it allowed me to act, in a way, as an ambassador of my country. Indeed, I did my best to give a true picture of Morocco through real-life videos from high school and university as well as some slides on Moroccan culture at large.

I congratulate the organizing committee on the success of the 49th Universal Festival and would like to thank them for the intercultural exchange opportunities they are offering students. I am sure I will always look at one of our pictures, where my wife, my son and I along with my Japanese group members, stand around Moroccan food with the Moroccan flag at the background, with a lot of pride in being a Chibadai student who

had the chance to participate in a great cultural event called Universal Festival.

(現 教育学部 教員研修留学生)

【CISG (元・現) スタッフたち】

[C 1 樹下幸苗 (2011 年度文学部入学、41 回リーダー)]

今回この文章を書くにあたり、自分がリーダーを務めた第 41 回UF (2012 年 6 月、なんともう 5 年前!) のDVDを見直しました。すると「ああ、ここはもっとこうすればよかったなあ」と、今になってわかる反省点を見つけ、また「こんなことあったなあ、本当に素晴らしい発表だったなあ」と、改めてUFに携わることが出来た喜びを実感しました。

学生時代の私は、国際交流に興味があって CISG に所属していましたが、現在社会人の私は国際交流の機会があまりない仕事に携わっています。そんな私にとって、UFでリーダーを務めた経験が、今どのような意味を持っているのか、少し考えてみました。

当時のUFを振り返って一番の感想は「怖いくらいにトントントン拍子に事が進んだ」というものです。発表国を決めることには少々苦労しましたが、実際に発表国や担当者が決まっただけからの私の作業といえば、「今作業はどこまで進んでる？」と各担当の進捗を確認するくらいでした。優秀な仲間恵まれ、「リーダーって何すればいいの?」「こんな何もしてなくていいの?」と逆に不安になるほどでした。そして、結果的に、UFは大成功。留学生・日本人学生皆で成功を喜び合うことが出来、大変嬉しかったことを覚えています。

振り返ると、この経験は社会人の疑似体験だったのかな、と今は思います。私は社会人 2 年目になりますが、与えられた自分の作業をひたすら仕上げればよかった 1 年目に対して、自分のすべき作業と後輩や協力会社の方に依頼すべき作業を見極め、分担して、一つの作業として完了させることを求められるようになってきました。作業依頼後は、必然的にその進捗管理が重要な仕事となります。UFで経験したこと、まさにそのものです。

「自分がやらないと!」と作業を抱え込みがちな私ですが、大切なことは、大きな単位での作業がうまくいくかどうか。各担当に任せたからこそ、大成功を収めたUF。UFでのリーダー経験は、自分の役割を把握し、自分のすべきことは何か考える難しさ・大切さという、仕事をしていく上で重要なことを体験することが出来た、貴重な機会だったのかもしれない。

私にこのような機会を与えていただき、協力してくれた留学生・CISG メンバーに心から感謝しています。ありがとうございました。

(現在、システムエンジニア関連の仕事に従事)

[C 2 田中智之 (2012 年度理学部入学、43 回リーダー)]

私は 2013 年 6 月の第 43 回のUFで、全体のリーダーとして関わらせていただきました。まず私が考えたのは、UFの趣旨の一つである「国際理解」という言葉でした。「国際理解」という言葉は、聞こえはいいですが、何を指すのかを決めることは非常に難しく、またそれ

は一人一人違う考えであるかもしれません。日本人が「国際理解」を考えると、外国に焦点を当て、彼らの声に耳を傾けることだけが全てではないと感じた私は、留学生の発表とともに、日本人による日本の伝統芸能を知ることも面白いのではないかと思い、千葉大学の日本の伝統芸能に関するサークルにも出演をお願いしました。その結果、居合道研究会と竹葉会（尺八や琴などの和楽器のサークル）に快諾していただき、アメリカ、イラン、マレーシアの発表と日本の伝統芸能を一つ場で発表する場を用意することができました。このような無理難題をお願いしてもご協力くださった見城先生をはじめ国際教育センターの方々や、一緒に 43 回 UF を作り上げた発表者、CISG のメンバーには本当に感謝しています。

高校生の頃、漠然と何か国際的なことをしたいと思っていた私は、1 年生の春に CISG を見つけた時にこれだと思いました。そこで留学生や海外留学する千葉大生と交流を重ねるにつれ、自分も留学したいと強く思うようになりました。そして現在、派遣留学生としてスイス連邦工科大学チューリッヒ校で数学の研究をしています。

日本を離れて海外の学生とともに生活・勉強をしていると、「日本はどのような風になっているの？」と聞かれることがしばしばあります。彼らにとってみれば、私は数少ない日本人の友人の一人であり、私の話が彼らにとっての日本の印象を作り上げることにになります。しかしながら、日本人だからといって正確な日本の現状を伝えることは不可能に近く、私の推測や主観が入り込む余地が大いにあります。また逆に彼らの方が、私よりも日本のことを詳しく知っている場合もあります。

ある時、デンマークの学生と話していたら、日本の漁業の話になりました。「日本はヨーロッパに比べ、より多くの種類の水産物を食べていて、フカヒレはヨーロッパではほとんど消費されない。その理由は、ヒレだけを取って泳げなくなったサメを海に捨てるという残酷なフカヒレ漁の方法にある。君はこのことを知っていたかい？」と彼は話しました。私は、フカヒレがどんな方法で取られたのかを考えたことは一度もなく、「知らなかった。それは残酷な方法だね」としか言うことができませんでした。

あとで調べてみると、日本のサメ漁の 9 割を占める宮城県気仙沼では、フィニングというこの残酷な方法は一切取られておらず、サメは余すところなく使われているそうです。私がこれまで食べてきたフカヒレがフィニングによるものではないという証明にはなりませんが、少なくとも日本ではフィニングが一般的ではない、ということができるのではないかと思います。

彼の発言は、彼がデンマーク人だからなのか、それとも環境との関わりをよく考えているからなのか、私にはわかりません。しかし、もし私が留学せずにこの話を伝聞として聞いたら、「〇〇人は□□」というステレオタイプを作り上げていたと思います。また、海外の学生と話すことは、私が何を知っていて、何を知らないのか、どのように自分の主観が入り込んでしまう癖があるのかということに気づく機会をたくさん与えてくれると感じています。

かつて「国際理解」という言葉の捉えどころのなさに悶々とした私ですが、時を経て留学を経験している今だからこそ、「国際理解」とは逆説的ではありますが、「自分自身をよく知

ること」ではないかと考えています。国際理解のきっかけとしてのUFが後輩たちの手によってさらに発展していくことを期待しています。

(現在、スイス連邦工科大学チューリッヒ校留学。千葉大学大学院理学研究科 修士1年)

[C 3 吉田健太郎 (2012年度園芸学部入学、44回リーダー)]

「UFがつむぐ留学生と千葉大学」

私は幼いころ海外で約8年間を過ごし、その影響もあってか、大学に入学する前から留学生と関わりを持ちたいと常々思っていました。そんな自分にとって CISG は願ってもない団体であり、特にUFに関わることで充実した期間を過ごせたように思えます。

44回UFでリーダーを務めることになった時は、常に留学生の気持ちに寄り添って取り組むよう心掛けていました。彼らは慣れない異国の土地で、しかも慣れない日本語で自国の文化や伝統を伝えようと一所懸命に取り組んでくれました。無論UFは楽しむものですが、留学生からすると、やはり緊張するようでした。本番前はかなり不安が募り、前日の夜遅くまで日本語の文法や発音がおかしくないか、確かめ合ったりもしました。そんな熱心で真面目な留学生とそれをサポートしてくれる CISG メンバー、UFに協力頂いた関係者皆様方のお陰で、第44回UFは無事に幕を下ろすことができました。その時の留学生の達成感と感謝に満ちた表情は今でも忘れることはできません。

UFについて言えば、個人的には交流会の時間が気に入ってました。UFは発表会と交流会の二部構成になっています。発表会ではステージ上で緊張していた留学生たちも、交流会ではリラックスしながら、自国の料理を振る舞ったり、来場した方々と触れ合う姿が印象的でした。その姿はとても自然体で、発表会での緊張が解けた分、そう感じさせているかのようには思えましたし、その和やかな雰囲気がとても居心地良い空間を造り出していたのだと、今ではそう思います。

私は現在社会に出て1年目ですが、仕事柄海外の方と接する機会があり、UFでの経験が少なからず活かしているように感じています。またUFという大きなプログラムを遂行する過酷さと充実感は、社会に出ても通ずるものがたくさんあると思います。そんな貴重な経験をさせてくれた素敵なUFが、今後も末永く続いていくことを願っています。

(現在、商社勤務)

[C 4 吉野汐音 (2013年度看護学部入学、45回リーダー)]

私は海外の文化に興味があり、留学生と関わってみたいと思って CISG に入りました。その活動の中でもUFが一番の思い出です。UFを通して、発表者である留学生の国の社会状況や文化について教えてもらったり、考えられたことはもちろん、発表を作りあげる中で、日本人学生と留学生が協働し、ひとつのものを造り上げる過程は、非常に有意義でした。協働をする中で、相互の価値観の差が明らかになったり、意見が合わないこともありました。しかし、その時にお互いが価値観を理解しようとし、より良い解決策を考え、同じ目標に向

かっていくことで信頼関係が生まれました。そういった過程は、まさに異文化理解・国際交流であったと実感しています。

また、UFでは発表者の母国の衣装を着たり、踊りを踊ったり、食べ物を作ったりしました。このように、受け身として情報を得るだけでなく、実際にその国の文化を「体験」することで、その国の方々が実際にどのようなことを大切にしているのか、またどんな生活を送っているかという理解を一層深めることができました。そしてステージ上で、それらを示すことで、観客の方々もその国の世界観をより体感できたのではないかと、思います。

私は4月から看護職として働くのですが、看護の領域においても、近年の国際化に伴い、外国人の方々への支援のニーズは高まっています。卒業研究では、在日外国人の母子の日本人との交流について調べ、お話を伺う機会がありました。そこで、在日外国人の方が日本で育児をしていくなかで、医療機関だけでなく、地域の様々なネットワークや支援が必要なのだと感じました。そのためには、まずは周りの日本人が異文化を理解しようとする思いがあったり、親しみのある態度で接することが大事なのだと考えました。

UFは、たくさんの方々に様々な国の文化を知っていただくとても良い機会です。発表をつくる側の日本人学生、そして観客の異文化理解が深まることは、ひいては日本に住む外国の方が住みやすい環境をつくることにもつながると思います。私自身も看護師として働きながら、CISGの活動を通して学んだ広い視野をもつこと、異文化理解の観点を忘れずに、対象者ひとりひとりの文化的背景や価値観を捉えながら良いケアを提供できるようになりたいと思っています。

(現 看護学部4年生)

[C5 郡川駿佑 (2013年度法経学部入学、46回リーダー)]

私がCISGに加入したのは、一年生の春でした。元々国際協力に興味があり、千葉大学に在籍する留学生を支援することで多くのことを学び、交友関係を広げていきたいと考えたのが加入のきっかけです。その後、UFには毎回何らかの形で関わり、46回UFではリーダーを務めさせていただきました。

46回UFは、より多くの国からの留学生に自国紹介の機会を与え、来場者の方に多くの国の文化を知ってもらおうと、これまでの形式とは異なり、会場のけやき会館全体を使用し、計10カ国の留学生によるパネル展示、料理提供、トークショー、民族舞踊を企画しました。さらに、海外留学中の日本人CISGメンバーとSkype中継を行い、留学生活の楽しさや困難について来場者と話し合う機会も設けました。

このように、今までにない新しい企画を提案したため、準備段階では多くの困難に直面しましたが、発表してくれた留学生やCISGの各系のメンバーは非常に協力的で、開催まで漕ぎ着けることができました。ただやはり、準備時間不足や係同士の調整不足が顕著で、反省点も多くありました。賛否両論はありましたが、新しいUFの形を提示できたことは、CISGのより活発な活動を促していく上で重要だったと考えています。

その後、私は交換留学を経験し、今度は自分が海外で自国文化を紹介するという機会に恵

まれました。その時にいつもUFで発表してくれた留学生のことを思い出し、彼らの献身的な協力や熱心な態度に改めて感謝し、自分も頑張ろうと思うことができました。

今後、日本に来る留学生や、海外に留学する日本人学生はますます増えていくと思います。その中で、UFやその他のCISGの活動は、お互いの国を理解し合う上で勉強になることが多いはずです。CISGの活動が、千葉大学留学生の大きな心の支えとなり、文化の相互理解や幅広いネットワークの形成につながることを祈っています。

これまでお世話になった先生方やCISGのメンバー、留学生の方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

(現 法経学部4年)

[C6 宮本眞衣 (2014年度文学部入学、46回パネル担当)]

CISGスタッフとして「UF50回のあゆみ」に書かせていただくことになった事を、光栄に思います。

私は46回UFでパネルディスカッションのプレゼンターとして、舞台に上り、留学生と共に発表し、47・48回ではUF運営の中心としても参加させていただきました。特に、パネルディスカッションは、留学生と日本人学生同士がテーマに沿って舞台上で議論をする初めての試みでした。当時私は大学に入学して間もない頃で、さまざまな国の留学生と交流できることや初めての取り組みに対して単純にワクワクしていたことを覚えています。しかし、ただ自分が「楽しむ」ことに集中していた私は、準備を重ねるごとに留学生との意志の疎通やお客さんに「見せる」ことの難しさの壁にぶつかりました。先輩方と何度も相談し、時には留学生と口論もしましたが、留学生、スタッフ、先生方大勢の方に協力してもらいながら準備に取り組み、本番では無事に発表を終えることができました。文化や言語などの異なる者同士で、一つの目標に向かって取り組むことは非常に難しい事で、留学生がどれだけ私たちの取り組みのために協力してくれていたかに気付きました。そして、それを乗り越えた時に彼らとより深い交流ができるということも学びました。一緒に発表した留学生とは今でも交流があり、その中の一人は私が大学に入学して以来の大親友となり、彼らに出会えたことを本当に嬉しく思っています。

47回UFでは、運営の中心として準備にあたりましたが、本番直前に体調を崩し、入院する事になってしまい、リーダーはじめすべてのスタッフ、留学生、先生方にご迷惑をかけてしまいました。今でも申し訳ない気持ちでいっぱいです。そのような中でもみんなの協力によって無事本番を迎えることができ、後でみんなの楽しそうな写真を見ることもでき、本当に救われました。

CISGで活動してきたこと、UFに参加できたことは、私の大学生活のなかでの本当に大きな存在です。協力してくださった皆様、そしてこれまでUFにお越しくくださった皆様本当にありがとうございました。

現在、難民問題、諸民族紛争等が深刻化し、先進国では他の民族に対し排他的なナショナ

リズムの傾向が強まっているように思えます。このような現代社会の背景の中で、「国境」にとらわれない人と人との交流、つながりを大事にしていくことが重要であると思います。今後もUFが、皆様にとってそのような交流の「きっかけ」の場になればと思っています。

(現 文学部史学科 3年)

[C 7 近藤理穂 (2014 年度薬学部入学、47 回リーダー)]

私は 47 回UFでリーダーを務めました。45 回ではステージ発表、46 回はポスター発表がメインだったので、47 回はそれぞれの形式の良いところを取り入れるために思い切って両方行うことにしました。新しい形式にするとなると、もちろん前回のタイムテーブルやレイアウトをそのまま使うことはできないので、ほぼ一から決め直しでした。また、この回からリーダーが 2 人に増えたのですが、相方と仕事を分担できた私とは違い、すべて一人で行ってきたこれまでのリーダーの方々には今でも頭が下がる思いでした。また、私たちリーダーの不手際で多くの方に迷惑をかけてしまいました。最後まで協力してくださった方々にこの場をお借りしてお礼を申し上げます。

さて、この回の来場者アンケートで、次のコメントをいただいたことを今でも覚えています。「ただ発表を聞いて、ステージでダンスを踊って楽しかった、というだけでは国際理解にならない」というものです。確かに、短い発表や、民族舞踊、衣装などの紹介だけでは完全にその国を理解することはできません。しかし、リーダーをやってみて感じたのは、UF が来場者と留学生が気軽に会話したり、準備の段階で CISG のメンバーや留学生が自分の国を見つめ直したりする良い機会になっているということです。UF は完全な国際理解には直結しないかもしれませんが、そのきっかけとしての役割は非常に大きいのではないのでしょうか。

CISG では毎回UFの後に反省会を行い、次回のUFをより素晴らしいものにするよう、しています。51 回目以降のUFが、参加者全員が母国を見直してみる機会、他の国についてよりよく知る機会としてより素晴らしいものになっていくことを願っています。

(現 薬学部 3年)

[C 8 川上あゆ美 (2014 年度文学部入学、48 回リーダー)]

「文化は国境を超える！－Cultures have no borders!」。これが、私がリーダーを務めた 48 回UFのテーマでした。リーダーを務めるにあたり、けやき会館の大ホールをお借りすることができる貴重な機会と環境を生かし、ステージ発表では「実際に」留学生たちの母国の芸術文化を披露してもらいたい、また、来て下さった方々には、留学生たちのパフォーマンスを実際に見て彼らの文化を共有し、何より楽しんで欲しいという思いがありました。このテーマは、私のUFに対するこのような思いを受けて、広報担当のメンバーが考えてくれたものです。

もちろん、ステージで実際にパフォーマンスを披露するとなると、その準備にかかる留学

生や国担当の学生の負担は大きくなってしまったという懸念もありました。それでも、この企画を快く引き受けてくれて、忙しい中スケジュールを合わせて練習し、本番で素晴らしいものを披露してくれた留学生と CISG スタッフには感謝の気持ちでいっぱいです。そしてリーダーとしては、発表者側からも見に来て下さった方からも楽しかったという感想を頂くことができたことを大変嬉しく思います。

UFのリーダーという大きな仕事を通して、全体を見ながら運営することの大変や、その達成感の大きさ、また、一人ではなく人と協力することでしか生まれない相乗効果のような感動を味わうことが出来ました。見城先生を始め、48回UFを共に作り上げて下さった方々、成功にご尽力頂いた方々へ感謝するとともに、これからもUFがより多くの人たちにこのような素敵な経験を与え続けてくれることを願います。ありがとうございました。

(現 文学部3年)

[C9 鎌田晃輔 (2015年度 法政経学部入学、49回リーダー)]

私が初めてUFを知ったのは46回の時でした。その時の自分はまだ千葉大学に入学したばかりの1年生で、CISGがどんな活動をしているのかもあまりよくわかっていませんでした。しかし、初めてUFの活動を見たとき、このイベントの規模の大きさ、それを運営している先輩方に驚いたのを覚えています。そしていつか自分もUFの中心メンバーとして動いてみたいと思うようになりました。

その後、UFのクイズ係や国担当の仕事の経験を経て、49回のUFではリーダーとしてこのイベントを運営することになりました。たくさんの方が楽しそうに交流する雰囲気、一生懸命な発表やおいしい料理を提供してくれる留学生、そしてみんなの協力している姿などを見られるUFが私は好きで、大きなイベントを動かすというやりがいから、リーダーになれたことをとてもうれしかったことを覚えています。

そして本番のUFには多くの方々にご来場いただき、何とか成功に終わることができたので良かったです。しかし、準備の過程で反省点があったのも事実です。細かいことは多くありますが、一つだけあげたく思います。それは留学生に大きな負担をかけてしまったことです。リーダーとして留学生への要求が多くなってしまったこと、国担当に必要な指示がしっかりと出せていなかったことは大きな反省です。UFにおいて留学生は主役であり、CISGメンバーがしっかりとサポートする必要があります。また忙しい中で引き受けてくれるので留学生への感謝の気持ちとリスペクトを忘れてはいけないということを後輩諸君には伝えておきたいです。

最後に、49回UFを無事に終えることができたのは留学生の方やCISGメンバーなどたくさんの方々の協力のおかげです。特に一緒にリーダーをやった山田さんと見城先生には、頼りない自分を多くの場面で助けていただき、なんとか自分がリーダーとしてやっていくことができたので感謝してもしきれません。このように多くの人の協力で成り立っている素晴らしいUFがこの後もずっと続いていくことを願います。(現 法政経学部2年)

〔C10 山中菜々子 (2015 年度園芸学部入学、50 回リーダー)〕

UF が 50 回を迎えるにあたり、リーダーを務めさせていただいたことを光栄に思います。今回は節目となる 50 回であるということで、いつもとは違う企画をしようという意見が上がりました。いくつかの案をあげ、その中から多数決で過去の出演者へのインタビューをすることになりました。その企画のおかげで、見城先生の協力のもと、何人かの留学生とコミュニケーションを取る機会を持つことができました。昔の UF の映像や、写真を見て先輩である千葉大学の留学生であった方と話すのはとても貴重な体験でした。発表した当時と、国旗が変わった国もあったりして、歴史の流れを感じ、伝統あるイベントであるということも実感しました。また、インタビューを受けてくださった方々は、自国と日本の架け橋になりたいと思い活動している方や、就職後にもう一度千葉大学に留学している方など、大きな志を持っている素晴らしい方々でした。

毎回の恒例であるステージ発表、料理提供では「世界の祭り」というテーマのもと、前日までの練習やリハーサルをこなすなか、無事に本番を終えることができました。協力してくれた留学生とは仲良くなることができ、いろいろな話をしていく上で、初めて知ることが多くあり、自分自身とても勉強になりました。

千葉大学に入り、CISG のメンバーとして活動を始めてから、いろいろな国の方々と関わることが多くなりました。外国の方と話すこと自体、高校生の頃まではほとんどなかったのが、今ではそれが当たり前になりました。新しく知ることばかりで、自分の考えを改めて考えさせられたり、価値観の違いから、視点を変えて物事を見ることができるようになりました。同じ物事を経験しても、それぞれ捉え方は違うということにも気づき、理解し合うことの大切さも知りました。

そして一年生から関わってきた UF は特に学ぶことが多く、それらのきっかけになりました。貴重な経験をさせていただいたことに感謝します。これからも、多くの学生がこの行事に関わって、貴重な経験をできればいいと思います。この素敵な行事が引き継がれることを願います。

(現 園芸学部 2 年)

【ノートテイクの会】

〔N1 小島千恵子 (2015 年度 文学部入学)〕

私は 2016 年度に行われた 2 回の UF にノートテイク会のメンバーとして参加させていただきました。とはいっても、ステージ発表をテイクし、ステージ上のスクリーンに字幕を表示するという形での参加でしたので、私個人としては発表等にはかかわっていません。そのため、純粋にステージ発表を楽しませていただきました。

表示している字幕は基本的に発表をする留学生の方から先に発表原稿をいただき、その原稿を少し加工して、当日アドリブなどをその場で修正しながら、字幕表示をしていきます。そのため発表前に、必ず一度は目を通すのですが、その原稿の量と内容に驚かされました。とても内容が興味深く、また日本語としても読みやすく、自分が留学生として海外に出た時、

これほどうまく現地の言葉で伝えられるだろうか、と考えてしまいました。そしてさらに驚いたのはその原稿をさらに良いものにしていこうとする留学生や CISG の姿勢です。数回行われるリハーサルの後、必ずと言っていいほど訂正原稿が送られてきました。このようにしてあの発表が出来上がっていくのだ、と感動しました。

私たちノートテイク会の活動の目的は、聴覚的情報を保証することです。こうしてたくさんスタッフや留学生の方々が作り上げた発表のおもしろさが、字幕表示することで、たとえ聴覚的障害があっても共有できるよう、ぜひ今後も参加させていただけたらと思います。

(現 文学部行動科学科 2 年)

¹ <http://mitizane.ll.chiba-u.jp/metadb/up/AN10581144/KJ00004137109.pdf>、にて閲覧ができる。

² 千葉大学附属図書館、千葉大学国際教育センターなどに保管している。

³ http://opac.ll.chiba-u.jp/da/curator/900116300/kokusaikyoku_5_1.pdf

⁴ 千葉大学学生支援課発行『平成 19～22 年度 新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援 GP）——双方向の多様な場づくりによる学生総合支援～ふれあいの環の多面的展開を通しての「総合的人間力」の涵養～ 最終報告書』2011 年 3 月、93 ページ。

⁵ 2017 年 2 月、見城からの照会メールに対する東さんの回答を要約したもの。

